植民地朝鮮に生きた文人画家・池雲英の夢体験―『白蓮志異』を中心に

佐々充昭

はじめに

朝鮮近代におけるナショナリズムの勃興とともに、朝鮮最古の国を建てた神話的人物である「檀君」を精神的求心点とする民族思想が創出された。このような檀君ナショナリズムは、一九〇九年二月に羅喆によって創設された大倧教に由来していることを、筆者は先行研究で明らかにしてきた。[1] しかし、羅喆による大倧教の創設には、不可解で謎めいた部分が多くある。最大の謎は、大倧教を創始したのは羅喆ではなく、白峯と称する正体不明の老人にあるとされている点である。[2] この白峯に関しては、教団側の資料に「霊的な姿で天から現れ、時に応じて出現する」[3]などと記されていることから、研究者の多くは、教団の歴史を神秘化するために、創設当初の信徒たちによって捏造されたものであると見なしてきた。[4] しかし、最近、大倧教創設時に記された資料が韓国で新たに発見され、従来の見解を大きく修正する必要が出てきた。[5] これら新出の資料には、羅喆の背後に秘密集団が存在し、その集団に属する人物たちが大倧教の経典・歴史書・儀礼書などを羅喆に伝達したことが具体的に記されているのである。[6]

また、羅喆の背後で大倧教の創設を促した別の集団が存在したことに関しては、金殷鎬（一八九二～一九七九）による注目すべき証言がある。金殷鎬は一九一八年に結成された朝鮮書画協会に入会し、一九二七年に帝国美術展覧会に入選した後、一九三三年に書画協会幹事をつとめ、一九三六年の朝鮮美術院設立に参与した経歴をもつ植民地期朝鮮を代表する画家である。[7] 彼は次のような証言を残している。

> ある年のこと、雲養金允植の誕生祝いの宴席に数人が集まり議論をした。この席には、省斎李始栄と趙素昂もいた。雲養の誕生日が一〇月三日であり、檀君の開天日と同じである故に、檀君教を設立しようという提案が出た。雲養も家一軒を出すから、そのようにしようと言った。雲養は勧農洞の小さな家を差し出し、檀君を祀ることを決心した。この部屋に祀る檀君の肖像画は、心田先生が引き受けた。心田先生は、毎日のように薄暗い部屋の中で檀君の肖像画を描き、門を閉ざして一歩も外に出なかった。この時、白蓮は檀君教の経典である『三一神誥』（白峰神兄）などを著述しようと、雲養が檀君教のために差し出した家の中で心田と一緒に閉じこもっていた。[8]

ここに出てくる金允植（一八三五～一九二二）とは、朝鮮末期に穏健開化派官僚として活躍した政治家であり、雲養は彼の号である。彼は羅喆の師匠でもあり、物心両面にわたって羅喆を支援した人物であった。[9] また、心田先生とは、金殷鎬の師匠にあたる安中植（一八六一～一九一九）のことであり、心田は彼の号である。彼もまた朝鮮を代表する著名画家

であった。[10] そして、白蓮とは、後で詳しく説明するが、朝鮮末期から植民地期にかけて文人画家として活躍した池雲英（一八五二～一九三五）のことである。白蓮とは彼の号である。また『三一神誥』とは、檀君の教えを記した根本経典として大倧教団内で最も重要視されている経典である。本経典が初めて世に出たのは、一九一二年に朝鮮国内で活版本として公刊された時であるが、[11] 大倧教側では、白峯が一〇年のあいだ天に祈祷した結果、黙示を受けて白頭山の石室から本経典を発見したと説明している。[12] これに対して、右にあげた金殷鎬の証言は、大倧教の創設史を根底から覆すような内容のものであると言えよう。もし仮に、金殷鎬の証言が事実であったとするならば、白峯なる老人は実在の人物ではなく、大倧教は金允植を中心にその仲間たちによって発案・企画されたものということになる。

さらに、この証言で『三一神誥』を創作したとされる池雲英に関しては、檀君肖像画を描いた人物であるという記録が大倧教側に残されている。それは『大倧教要鑑』の中に収録されたもので、当時教団の幹部であった白南奎（一八九一～一九五六）による証言である。そこでは、「大宗師〔羅喆を指す：引用者〕は〔檀君の〕霊夢を見てから、その当時有名であった池白蓮画伯にそれを模写させ、庚戌（一九一〇年）八月二一日〔陰暦を指す：引用者〕に天真を初めて奉斎した」[13] と述べられている。「天真」とは檀君肖像画のことであり、ここでいう「池白蓮画伯」とは、まさに池雲英のことを指している。

このような証言をもとに、筆者は池雲英という人物に関心を抱き、彼の経歴について詳しく調べてみた。すると、彼の生涯が非常に興味深いものであることがわかった。まず彼は、朝鮮末期から植民地期にかけて医学と朝鮮語学の分野で活躍した池錫永（一八五五～一九三五）の実の兄であることがわかった。[14] 池錫永は、天然痘の治療法である種痘（牛痘）を朝鮮に導入した人物として有名であり、一八九九年に学部所属の医学校が設立された際に初代校長に任命され、それ以降、一九〇七年に大韓医院として改編されるまで八年間にわたって校長をつとめた。その他、国文（ハングル）の研究にも尽力し、一九〇八年に朝鮮政府の研究機関である国文研究所の委員となり、朝鮮で最初の漢字国文辞書である『字典釈要』（一九〇九年）を刊行した。それらの功績が認められ、一九〇八年六月に太極章が授与され、一九一〇年六月には勲四等に昇叙されて八卦章が授与された。日韓併合後も彼の社会的評価は高く、一九二八年には種痘実施五〇周年を迎えて、池錫永は朝鮮のジェンナー（英国人E. Jenner：種痘の発明者）と賞賛され表彰されている。[15]

一方、兄である池雲英の方も、若き頃は活発な活動を行っていた。特に彼は、一八八〇年代に日本へ渡って写真術を学び、それを朝鮮へ導入した人物として知られている。しかし、一八八四年に起こった甲申事変を契機に、彼の人生は大きく狂い始めた。甲申事変の失敗後、首謀者であった金玉均は日本へ亡命したが、池雲英は国王の密命を帯びて、金玉均を暗殺する刺客として日本へ渡った。しかし、金玉均暗殺は失敗してしまい、池雲英は日本警察に逮捕されて朝鮮本国へ強制送還された。その後、池雲英は朝鮮政府からもその罪が問われて、平安道寧辺へ流配の刑に処された。それがきっかけとなって、彼は精神を病んでしまった。韓国併合後の一九一一年に、彼はソウル近郊の三聖山にある三幕寺に隠遁し、文人画家としての活動を続けながら不遇な人生を送った。

このように数奇な人生を辿った池雲英であったが、書画の分野ではその技量が高く評価され、数多くの作品を残した。一般公開された書画作品に関しては、すでに美術の分野で専門的な研究が進められている。その一方で、池雲英は書画以外にも数多くの論著・草稿類を書き残した。[16] その多くは埋もれたままになっていたが、近年、彼の遺族が所有してい

た論著・草稿類がソウル歴史博物館に寄贈された。[17] その過程で、筆者は池雲英が記した『白蓮志異』という著書の複写を入手することができた。[18] 池雲英は、夢の中で聖賢や神霊たちからお告げを受けるという体験をしたが、本書にはそのような個人的な夢体験の内容が詳細に記されている。本稿では、『白蓮志異』に記された夢体験について考察しながら、[19] 池雲英の内面世界がいかなるものであったのか明らかにしてみる。特に『白蓮志異』には、高麗時代に生きた第二五代前の先祖に導かれて池雲英が白頭山の天池を訪れるという夢体験が記されている。筆者はかつて、池雲英と大倧教との関わりについて考察した論考において、一九一〇年代に池雲英が羅喆と共に白頭山天池を訪れ、その時に模写した絵を写真銅版でブロマイド化し、大倧教徒たちに多数配布していた可能性があることを指摘した。[20] 本稿では特に、『白蓮志異』の中に記された白頭山天池の夢体験について考察しながら、池雲英と大倧教との関係について論じてみたい。

一、波瀾万丈なる池雲英の生涯

池雲英は一八五二年に、忠清道忠州出身の父・池翼龍（一八一二～一八九一）の四人息子中の三男としてソウルの楽園洞で生まれた。[21] 生まれた時の名は「運永」であったが、後に「雲英」と改名した（本稿では池雲英で統一する）。彼の父親は漢方医を営んでいたが、家柄に関しては中人であったという説が有力である。[22] 実際、池雲英は主に中人たちと交遊し、一八七〇年代末頃には六橋詩社に入り、その同人として活躍した。六橋詩社とは、金正喜の弟子であり巷間文人として知られた姜瑋（一八二〇～一八八四）を指導者として、清渓川広橋附近に住んでいた訳官や医官などの中人たちが結成した集まりであった。[23] 池雲英はこのような技術職に携わっていた中人たちとの交流を通じて、当時、中国や日本を通じて紹介されていた西洋の新文化に関心を抱いた。

その後、一八八二年七月に壬午軍乱が起こると、朝鮮政府はその謝罪のために朴泳孝を修信使として日本に派遣した。池雲英はこの時、随行員の身分で日本へ渡った。彼は修信使一行の日程に従って日本の都市を周りながら、蒸気船・美術館・写真館など新しい文物を見聞した。それらに魅了された池雲英は、特に写真術を学ぶために神戸に留まった。当時、神戸には、平村徳兵衛という日本の写真界でその名がよく知られた人物がいた。彼は一八六八年頃に、長崎から神戸に来たフランス人写真家のゴルドーに頼んで自宅を写真館として貸与し、彼から写真術を学んだ。一八七〇年には神戸で写真館を開業し、一八七二年から外国からカメラのレンズと写真材料を輸入する輸入商を兼ねた。[24] 写真術に興味を抱いた池雲英は、一八八二年一二月にこの平村の写真館に留まって写真術を学んだ。

その後、一八八四年三月に朝鮮政府から統理軍国事務衙門の主事に任命されたために、池雲英は写真術の習得を中断して本国に戻った。そして、ソウル鍾路の麻洞に自分が運営する写真館を建てた。彼の写真術は世間で大きな評判となり、[25] 同年三月一六日には朝鮮人で初めて国王高宗の写真を撮影するという栄誉にあずかった。[26] ちなみに池雲英は、別の機会に閔妃と純宗の肖像写真を撮影してもいる。[27]

しかし、池雲英の写真館は長くは続かなかった。一八八四年一二月に起こった甲申政変は、池雲英にとって大きな試練となった。甲申政変が起こると、憤怒した群衆と清国軍は開化派と日本勢力に対して報復に出て、暴動へと変わった。彼らは先進文物を受け入れた文化施設を日本の文物であると見なし、放火と略奪を行った。この時、池雲英の写真館も大きな被害を被った。徒党を組んだ輩たちが写真館に乱入し、写真機材

と施設をすべて叩き壊して略奪を行ったのである。[28]

池雲英を襲った試練は、ただそれだけではなかった。その後、池雲英は、甲申政変の主導者であった金玉均の暗殺を試みようとして失敗し、流配の刑に処されてしまったのである。この事件に関しては、朝鮮側にも日本側にも詳しい資料が残されている。[29]また、当時日本の大陸浪人たちは金玉均の支援を行っており、金玉均の身辺を付け狙っていた刺客に関して詳しい記録を残している。[30]それらにもとづいて、この事件における池雲英の行動をまとめると次の通りである。すなわち、甲申政変が失敗に終わると、金玉均をはじめとする首謀者たちは日本へ亡命した。これに対して、池雲英は、国の転覆を企てた逆賊が外国の地へ逃れて生き延びていることを憂い、吏曹参判の閔丙奭に自ら金玉均を刺殺する計画を持ちかけた。[31]こうして閔氏の周旋のもとに、池雲英は一八八六年二月に国王の命によって、金玉均を斬殺することを命じられた。その際、特差渡海捕賊使という役名が与えられ、国王の御璽が押印された委任状とともに、費用として金五万円が給付された。こうして池雲英は、同年二月に仁川港から釜山を経由して長崎へ渡った。長崎に到着した後、彼は神戸から大阪さらに奈良へ行き、奈良で大仏を見学した後、京都で一週間滞在した。その後、大津を経由して伊勢へ行き、伊勢神宮を参拝した。その時、お神楽を奉納しながら、「天照皇太神皇」に黙祷して「上安宗社、所願得失、下済生霊、敢質神明」と祈り、お神籤を引いて「上吉」が出たと記録に記されている。[32]その後、山田を発って、尾張・三河・近江・駿河・相模を経て、湯本に至ると温泉に入浴した。そして同年五月に東京神田に到着している。[33]日本渡航に必要な経費が支払われていたこともあってか、実に贅沢な日本旅行を楽しんでいたようである。

こうして東京に到着した池雲英は、金玉均に面会を求める内容の手紙を送った。しかし、池雲英が刺客として遣わされたことをすでに察知していた金玉均は、面会を謝絶する旨の回答書を送った。[34]そして、知人たちを池雲英のもとへ接近させ、彼が刺客である証拠をつかんで、日本の警視総監に自身の身辺保護を要請した。こうして、暗殺事件が暴露され、池雲英は日本の警察に逮捕された。日本政府はこの問題を外交問題にしたくなかったために、同年六月に池雲英をそのまま朝鮮本国へ送還した。その後、朝鮮政府内では、金玉均暗殺の密命を自白した池雲英の行為が糾弾され、一八八七年五月に平安道の寧辺へ流配する措置がとられた。[35]この時に受けた精神的衝撃はとても大きく、池雲英は流配生活を送る中で精神を大きく病んでしまった。彼は一八八九年一月に配流を解かれるが、流配地から戻ると、それまで使っていた「運永」という名前を「雲英」に変え、「雪峰」という号を「白蓮」に変えた。このことからも、この事件が池雲英の人生において大きな転換点となったことがわかる。

その後、彼は政治の世界からは身を引き、書画に没頭するようになった。この時期の活動で注目したいのは、彼が数次にわたって中国を訪問し、上海を拠点に活動していた海上派の中国人画家たちと交流をしている点である。池雲英の記録によると、彼は一八九二年頃に中国の杭州と蘇州を旅行し、この時、海上派の書芸家である兪樾と深い交流をしている。[36]また一八九三年に上海を訪問して、海上派画家たちと接触しながら彼らの多様な画法を習得した。[37]さらに、一九〇四年冬にも油絵を学ぶために再び上海を訪問している。[38]その他、池雲英の中国行きに関しては、高宗の命を帯びて中国から道教を輸入してきたという興味深い記録が残されている。これに関して、李能和が著した『朝鮮道教史』によると、光武年間に高宗が池運英（ママ）と崔時鳴らを中国江西省の龍虎山に派遣し、張天師像をもって来させて、楊根郡（現在の京畿道楊平郡）の龍門山に道観を建てて奉安したと伝えている。[39]このような中国道教との深い関わりは、後で詳述するように、夢の中で聖賢や神霊に出会うという池雲英の体験

に大きな影響を与えたものと考えられる。

韓国併合後、池雲英は一九一一年頃にソウル近郊の三聖山にある三幕寺の中に白蓮庵という小さな庵を建てて、隠遁者のような生活を送った。その一方で、彼の制作した書画は当時の朝鮮画壇で高く評価され、一九一〇年代中盤頃からは文人画の大家として称賛されるようになった。彼は、当時中国で流行していた海上派の精巧な画法を模写しながら技量を磨き、特に山水画と人物画を得意とした。朝鮮人画壇の中心的役割を果たした書画協会にも正会員として登録し、[40] 一九二二年の第一回朝鮮美術展覧会においては『山人濯足図』を出品して入選を果たしている。また一九二三年には、純宗の誕生日を祝うために『老仙図』一幅を献上して、金五十円の褒賞金を下賜された。[41]

このように池雲英は文人画家として高く評価されていた反面、長年患い続けた奇妙な病気のために、晩年に至っても依然として世間から変人扱いをされた。例えば、一九三一年五月に発行された『別乾坤』のコラム欄を見ると、「雪蓬池運永老人は、詩と文に精通し、書にも長けて絵も上手であり、池四絶〔詩・文・書・絵の四分野で並ぶ者がいない：引用者〕と言われた。しかし、最近は、痴絶・狂絶・禅絶（彼が禅道修練をよく行ったためである）・慧絶（禅の公案をよく解いた）等の四絶を加えて、池八絶と言われている」[42] という記事が掲載されている。このことから、彼が世間の人々から狂人扱いされていたと同時に、観音信仰や禅修練などに励んでいたことから、仏教に精通した人物として知られていたことがうかがえる。このように数奇な人生を辿った後、池雲英は一九三五年六月六日に嘉会洞の自宅で八四才の人生を終えた。[43]

二、腹中に宿る魔鬼が引き起こす奇妙な病

前節で述べたように、金玉均暗殺の失敗とそれに続く流配措置は、池雲英の人生を大きく狂わせた。彼は寧辺に配流された一八八七年頃から精神を病み始め、流配が解かれた一八八九年頃には発狂したかのような症状を呈するようになった。その病気とは、お腹の中に得体の知れない異物感があって、そのまま放っておくと、突然大きな叫び声を発して踊り出すというものであった。この奇妙な病について、池雲英は次のように説明している。

私が狂うのは、本当に狂っているのではない。また、狂ったふりをしているのでもなく、狂った状態にさせられているのである。…（中略）…もし心を動かして念じれば、人と交流する時でも、少しも狂態をさらすことはない。ただ、お腹の中に〔何か〕物が入っていて、フックのように引っ掛かって塞がれている。呼吸をするにも自由がなく、日中でも意識が昏暗としている。もし一切の妄想を放下して、純粋に清らかな禅定の状態に至ると、直ちに発狂したような症状が出てくる。〔何かを〕叫び唱えて、罵り辱めることを言う。激しく踊って足を踏みならし、至る所を飛びまわる。そして、最後には倒れて死んだようになり、また元に戻る。このようなことが白昼に起こる。これは即ち、昔の書に言うところの「安心が少なければ発狂も少なく、安心が大きければ発狂も大きい」というものであろう。私が狂った状態にさせられているというのは、まさにこのことである。[44]

ここでは「〔何か〕を叫び唱える」と書かれているが、実際に発せられる叫び声とは「朝鮮興（조선흥：チョソン、フーン）」というものであった。

この症状が最もひどくなった時には、「昼夜を問わず、睡眠から覚めて起きる時、必ず『朝鮮興』という叫び声を上げて驚いて目覚める。くしゃみをする時もまたこの声を発する」[45]までになった。

この奇妙な症状を呈する病のために、池雲英は一九一一年秋頃に始興郡三聖山にある三幕寺に白蓮庵という庵を建てて住んだ。そこは深い渓谷の中にあり、人がめったに訪れない場所であった。彼はこの病を治すために、心の中で観音菩薩を念じ続けるという観想修練を行った。しかし、禅定の境地に至り、心が安らかになると、かえってお腹の中にある力が解き放たれ、「朝鮮興」と大きな声で叫ぶのであった。このような状態が四〇年ほども続いた。その症状が激しかった時には、隣家に住んでいた妊婦がその声に驚いて、恐れのあまり流産をしてしまい、家を売って立ち退いてしまったこともあったと池雲英自ら述べている。[46]

この奇妙な病気に関しては、当時の朝鮮社会の中でよく知られていたようである。例えば、一九一三年の夏に、李完用・任善準・宋秉畯・韓昌洙ら錚々たるメンバーの朝鮮貴族たちが三幕寺に遊びに来た。彼らは弟の池錫永と酒を飲みながら、兄の池雲英の病気について次のように語った。

〔皆が〕盃を交わしていた際、宋秉畯は〔池錫永に向かって〕次のように尋ねた。令伯氏先生〔兄の池雲英を指す：引用者〕は、最近でもまだ「朝鮮興」と叫んでいるのですか。すると、任善準は笑って言った。合併後にこのような声を聞くのは、とりわけ味気ない。しかし、李完用は言った。そうではない。ただ李氏〔李氏朝鮮王朝：引用者〕の大権が無くなっただけであり、その国土や民族においては少しも損なわれたものが無い。「朝鮮興」という叫び声は、私からすれば、味のあるものである。このように談話していると、たちまち「朝鮮興」という声が白蓮庵から聞こえてきた。辺りが震動して、山が鳴り、谷がこれに呼応した。皆は大笑いして、その話をやめた。このようにして、〔池雲英〕先生の「朝鮮興」という叫びは、朝野の共に知る所となり、僧侶や俗人の共に認める所となった。[47]

この会話の中に出てくる宋秉畯は、一九〇九年に一進会総裁として「日韓合邦声明書」を発表し、韓国併合を促す世論を造成した人物である。彼は併合後に子爵の爵位を授与され、朝鮮総督府中枢院顧問となり、一九二〇年には伯爵に陞爵された。任善準は一九〇七年に李完用の親日内閣で内部大臣をつとめ、第三次日韓協約（丁未条約）締結の際に積極的に同調して「丁未七敵」と非難された。一九〇八年には度支部大臣に任命され、親日儒教団体である大東学会に参与して儒林たちの親日化に尽力した。併合後は子爵の爵位を授与され、一九一九年まで中枢院顧問をつとめた。李完用は、一九〇五年の第二次日韓協約（乙巳保護条約）締結に賛同した「乙巳五賊」の一人であり、一九一〇年には総理大臣として全権委任の資格を以て日韓併合条約を締結した。併合後にその功労が認められて、伯爵の爵位を授けられ、朝鮮総督府中枢院の副議長となり、一九二〇年には侯爵に陞爵された。彼らは第一級の親日家として、朝鮮の民族独立運動家たちからは「売国奴」と非難された。彼らにとって、池雲英の発する「朝鮮興」という叫び声は、まったく後味の悪いものであったに違いない。

池雲英の病気が当時の朝鮮人の間で広く知れ渡っていた事実については、尹孝定が著した『韓末風雲秘録』という本を通じても確認できる。本書では「恨鬼に取り憑かれた池雲英の怪談」と題して、池雲英に関する逸話が紹介されている。[48]そこでは、池雲英が自分のことを西山大師の生まれ変わりであると考えているとして、次のようなことが記されてい

る。すなわち、昔、西山大師が妙香山のある寺で修行をしていた。その時、近くの農家に姉妹が住んでおり、姉はウンニョ（옹녀）といい、妹はマンラン（망란）といった。二人は西山大師に恋をして大師を誘惑したが、無視されて冷たく退けられた。その後、姉妹は失意のあまり首を吊って死んでしまった。やがて西山大師は生まれ変わって池雲英となった。この姉妹は雍貴姫と芒貴姫という妖鬼となって池雲英の腹中に入り込み、西山大師から受けた恨みに対して復讐をしようとしている。[49]『韓末風雲秘録』には、大略このような話が掲載されている。

何とも奇妙な話であるが、この話の舞台が平安道寧辺の妙香山である点に注目したい。周知の通り、妙香山は別名で太伯山とも称し、高麗時代から朝鮮時代にかけて檀君が誕生した場所として知られていた。[50]また、妙香山は仏教の山としても有名で、高麗時代以来、多くの寺刹が建てられていた。特に妙香山は、豊臣秀吉の壬辰倭乱の際に活躍した西山大師（一五二〇～一六〇四：本名は休静、号は清虚）が住んだ山として知られている。西山大師は妙香山で修行して悟りを開いた後、同山にある普賢寺を活動の拠点とした。西山という号は、妙香山が朝鮮半島の西側に位置する主山であることから名付けられたものである。[51]そのために、朝鮮時代において妙香山を代表する人物と言えば、西山大師が第一にあげられた。池雲英は金玉均暗殺未遂事件で寧辺へ流配されたが、そこはまさに西山大師の活動拠点であった妙香山の普賢寺があるところであった。このような寧辺という土地の持つ記憶から、池雲英は自らが患った病気の原因を西山大師と結び付けて考えるようになったと思われる。

こうして、奇妙な病気の原因が腹中に宿った魔鬼にあると考えた池雲英は、この魔鬼を追い出すために観音菩薩を念じるという観想修行を行うようになった。その過程で彼は、夢で古の聖賢や神霊たちに出会うという体験をした。その体験はまるで現実世界のようであり、[52]彼はいろいろな論著でその夢の内容について記している。[53]それらを読むと、特に池雲英の代から数えて第二五代祖である文清公と文肅公という人物が、夢の中に頻繁に登場しているのがわかる。池雲英自身の記録によると、文清公とは、池雲英から遡って第二五代目の傍系の先祖にあたり、諱を光庭といい、高麗文宗の時代に平章事兼太子保をつとめた人物である。文清公は一九一二年四月頃から池雲英の夢の中に現れて、しばしば神異なるお告げを与えている。[54]一方、文肅公は、文清公の四従兄弟で、諱を宗海と称し、高麗文宗の時代に侍中をつとめて忠源伯に封じられた人物である。彼は白頭山天池の主神となり、池雲英の夢の中に頻繁に現れるようになった。[55]この文清公と文肅公は、夢の中で池雲英に助言を与えながら、常に池雲英を慰め励ます働きをしており、一種の守護神霊のような役割を果たしていたと考えられる。

これら二人の先祖との関係で特に興味深いのは、文肅公の方が、天界で白頭山天池の主神となり、池雲英の腹中に宿った魔鬼に関する前世の因縁を語りながら、その魔鬼を追い出す方法を教えている点である。これに関しては、『白蓮志異』の中に記された一九二六年陰暦一〇月一八日の夢の中で詳しく述べられている。この夢では、まず白頭山の童子が現れ、文肅公が書いたとされる文章が池雲英の目の前に示される。その内容を抄訳すると、次の通りである。

池雲英の前世は西山休静大師であった。西山大師は幼くして出家し、発憤して仏道を学び禅の修行に励んでいた。その時、不幸にも一人の美しい処女に出会った。彼女は西山大師に恋い焦がれたが、西山大師はこれを頑なに拒んで斥けた。思いを遂げられなかった彼女は毒を飲んで自殺し、死んだ後に酷悪な陰鬼となった。この女鬼は天界に生まれ直して天魔となり、名前を雍鬼飛（ウンキビ）と称した。また、その

天魔に嫁いでその妻となったのが芒鬼飛（マンキビ）であった。この二体の魔鬼は、共に大きな力を持つ魔王となった。…（中略）…上帝は、西山大師に朝鮮へ転生することを命じた。その際、国民を豊かにすること、人倫を明らかにすること、正道を崇奉させること、という三つの大事を委ねた。〔西山大師の生まれ変わりとして誕生した〕池雲英はこのような重大な任務を担っていたために、母の胎内に下りた時に二つの魔鬼が追いかけてきて、池雲英の霊と一緒に母のお腹の胎に入った。…（中略）…池雲英が寧辺へ流配されるに至った時、腹の中に宿った魔鬼が最も激しく暴れ出した。そのために文粛公は、妙香山神となった徐寅昶に命じて、池雲英がひたすら観音を黙念する修行を行うように促した。〔池雲英がその通りに修行を行うと〕雍鬼飛と芒鬼飛の二体の魔鬼は、禅定によって打たれたのを知り、まるで雷鳴が轟くかの如く狂ったように叫び出した。それと同時に、罵りと辱めを言いながら歌をうたって激しく踊り出し、至る所を飛び回った。最も多く発せられるのは、「朝鮮興」と大きく叫ぶ声であった。丁亥（一八八七年）より今の丙寅（一九二六年）の四十年間、「朝鮮興」と叫ぶ声は数百万回に及んだ。人がこのような状態になるのは魔鬼のなせる業であり、このようなことは天地が分かれて以来、未曾有のことである。こうして千回もひっくり返ったり、万回も倒れたりして、その様子は形容することができないほどであった。[56]

ここに記されている通り、池雲英は文粛公のお告げに従って、実際に観音菩薩を念ずる観想修練を行った。これに関しては、池雲英の友人であった尹致昊が、「池雲英は自分が直接色づけした美しい観世音菩薩に祈祷し、一日に三回その前に白米を捧げる」[57]と日記に記している。[58]また池雲英は、三幕寺の近くにある岩壁に、夢の中で観音菩薩から示されたとされる「三龜字」を刻印した。それは亀の字の篆書体を呪術的に表現したものであるが、現在でもはっきりと残っている。[59]（**写真1**を参照）

このような事実から、池雲英が常に観音菩薩を黙念する観想修練に励んでいたと同時に、そのような修練を長く続けなければならなかったほど、彼の病気が苦痛に満ちたものであったことが確認できる。

写真1：三幕寺周辺にある「三龜字」
（2019年1月12日筆者撮影）

三、白頭山天池に関する夢体験

『白蓮志異』の中に記されている夢体験の中で、とりわけ興味深いのは、一九二六年陰暦一〇月四日（陽暦一一月八日）の明け方に見た夢である。この夢の中で、池雲英は白頭山の天池を訪れている。その時の夢について、彼は次のように記している。すなわち、池雲英が一根雙竿杖[60]を付いて庭の中に立っていると、突然、自分の身体が浮かび上がり、家の屋根を越えて空中に上昇する体験をした。まるで無重力状態のように空

中に漂い、東西南北上下どんな方向にも自分の意のままに飛行することができた。そこで池雲英は白頭山へ飛行移動した。その時の様子について次のように記している。

私はいつも白頭山に登って闥門池〔天池のことを指す：引用者〕を見ることを願ってきたが、今やそのことが可能となった。北に向かって立つと、自動的に風や雷のように素早く移動して、しばらくすると白頭山に至った。飛行をやめて下に着地すると、闥門池の上に座した。天は清く太陽が輝き、波を立てた碧い水に明るく反射し、一つの大きな鏡が広々と輝き、見渡す限りガラスのようであった。ただ一人感嘆して、次のように賞賛した。白頭山はまさに朝鮮の絶頂である。この大きな池の存在たるや、ああ、ああ、何と奇妙で偉大であるか。天下万国の中で主山の上に池があるなどとは、未だに聞いたことがない。それ故に、〔白頭山の闥門池は〕世界の中で唯一無二のものである。[61]

ここで注目したいのは、まるで過去に現地を実際に訪れたことがあるかのように、天池の様子が非常にリアルに描かれている点である。この点に関しては、本稿の最後でまた詳しく述べることにして、この夢の続きをみていこう。

夢の中で池雲英が白頭山の天池に降り立ち、その絶景に感動していると、彼の前に青い衣を着た容姿の美しい一人の童子が突然現れた。その童子は、池雲英の先祖が、高麗時代に侍中をつとめた忠原伯・池文肅公であり、その方が白頭山天池の主神であることを伝えた。そして、池雲英がここにやって来たのも、その方が招聘したからであると告げた。これを聞いた池雲英が、その方に謁見したいと言うと、童子はそれを承諾して、池雲英を文肅公のもとへ案内した。その時の様子を記した箇所を抄訳すると、次の通りである。

〔童子が〕私を引導して数里行くと、赤い欄干をもつ一つの大きな虹型の橋があった。その橋を渡ると、一つの大きな翡翠の石碑があった。その碑面には、「白頭山王天池大神人民禍福霊簿総管威武専制九龍雷雨統御城隍上陽宮主之碑〔白頭山王の天池大神、人民の禍福や霊的な帳簿をすべて管理し、威厳があって力強く、天地をすべて統治し、九龍や雷雨を制御し、土地の神を統御する、上陽宮の主であられる方の碑：引用者訳〕」という三十四字の行書が刻まれていた。その筆法は神霊が化したかのようであった。碑に刻まれた数十行の楷書もまた、神霊が入ったように精妙で隙間がないほど細かく見えた。さらに行くと、ある場所に到着した。美しい玉で飾った宮殿があり、燦然と光輝いていた。玉のような美しい花をつけた宝樹が青々と生い茂っており、香気が漂っていた。その中には三つの門があった。中門の梁には、三字の隷書で「上陽宮」と書かれた板が懸けられていた。…（中略）…私は恐れおののき、身をかがめて慎みかしこまって中に入って行った。正庁（入り口の広間）の階下に至って再拝した後、恐る恐る仰ぎ見ると、四字の篆書で「崇霊寶殿」と書かれた板が懸けられていた。そして、文肅公が黄金の鳳冠をかぶって、紅に錦を織った龍袍をはおり、椅子に腰掛けて座っていた。〔その姿は〕神々しく重々しい威厳をたたえており、その左右には数十人の侍者たちが立っていた。皆、衣冠を整えており、その容貌は尋常ではなく非凡であった。…（中略）…私は文肅公の前に進み、二回礼拝をして跪いた。文肅公は「雲英よ、お前は私の二十五世孫である」と言った。千年の隔たりのある先祖と子孫が、幽玄の世界で互いに対面するとは、なんと神奇なことであろうか。私は感極まって、涙を流して泣き、文肅公もまた目に涙を浮かべた。[62]

ここでは、池雲英が夢の中で体験したことが、まるで現実の世界であるかのように非常に生き生きと描かれていることに注目したい。またこの続きの場面では、文粛公と別れる際に、特別な贈り物が与えられたことが記されている。少々長くなるが、その場面を抄訳すると次の通りである。

文粛公は、「今特別に、上帝が諸仏に命じて、お前に一つの物を下賜された。それを持ち帰るように」とおっしゃった。そして、庭の前にあった一つの大きな巌を指さして「お前はこれが何かわかるか」と言った。私は「巌です」と答えた。すると文粛公は「この巌は、石ではなく金である。この金の巌は、闥門池の水底にあったものである。お前に与えるために、今朝、龍神に命じて引き揚げて来たのである。これは「金生水（金が水を生むこと）」を意味している。この金の巌は闥門池から出たものであり、すなわち金が〔天池の〕麗しい水を生んだのである。」文粛公は椅子から立ち上がると、私を連れ立って庭の方へ下りて行き、私にこの巌を見せた。私はこれが金ではないように思うと、文粛公は笑って「まだ分からなくても大丈夫だ」と言った。そして、白い羽の付いた扇子を振って風を起こし、水苔をすべて落した。すると、すっかりきれいになって、燦然と光り輝き、純金でできた黄金の巌となってあらわれた。四方の周囲はおよそ八・九間ほどであり、高さは十尺余りであった。文粛公は「お前はただ一人でこれを持ち帰らなければならない」と言った。これに対して「このような巨大な金の巌を、小さな私がどうして持ち帰ることができるでしょうか（いやできません）」と答えた。すると、文粛公は笑って言った。「この金の巌はお前にとって餅のように軟らかく、紙のように軽いのだ。なぜならお前は仏の手を借りることができるからだ」と言った。文粛公は私に、一根雙竿杖を〔この金の巌に〕一刺しするように命じた。私が杖を突き刺すと、二尺ほど中に入っていった。文粛公はこれを持ち挙げるようにと命じた。〔そのようにすると〕コウモリ傘をさしたように軽々とそれを持ち上げることができた。私はとても驚いて、「これは何と奇妙なことでしょう」と言った。文粛公は大声で笑いながら、「超常的な造化の力とは、まさにこのようなものである。もうこれ以上何も言う必要はないだろう。早く立ち去りなさい」と言った。童子にも一緒に帰るように命じられた。…（中略）…私は童子と一緒に空に上って、南の方へ飛んで帰って行った。そして、半時もたたない頃に京城に到着した。下をのぞき見ると、黄金町であった。童子は「〔池雲英〕先生、下の方に金の巌を落としてください」と言った。それで私は一根雙竿杖を下に向けて、金の巌を抜いて下方に落とした。すると大きな雷が鳴り響く音がして天地が震動した。私はとても驚いて、全身に汗が流れるのを覚えた。それで夢から目覚めて、起き上がった。[63]

夢とは言え、何とも奇妙な話であるが、これに関して少し補足説明をしておこう。先に述べたように、池雲英は一九二〇年代に斉藤総督から「一根雙竿杖」を記念品として授与された。また、この夢の最後では、金の巌を京城の黄金町に落とすという場面が出てくるが、ここでいう黄金町とは、現在のソウル市の乙支路付近のことである。日本の植民統治が行われていた一九一四年に行政区画の統廃合によって付けられた町名であり、当時は一丁目から七丁目まであった。[64] この夢の内容を一言で言うと、白頭山天池の底から出てきた金の巌に、斉藤総督からもらった一根雙竿杖を突き刺して、それを京城まで運んで来て黄金町に落とすというものである。その意味を敢えて解釈するならば、白頭山天池の生命力を

ソウルの中心地に注入することによって、貧困にあえぐ朝鮮の都を「黄金の町」に変えようという池雲英の願いを投影したものであったと言えるだろう。

四、「金姓復音」と朝鮮の経済的復興

このような不思議な夢を見た後、池雲英は二日間何も食べず、転々と寝返りをうって考え事をし、白痴のように悶々として過ごした。すると、突然、右耳に白頭山童子の声で、「文粛公が筆を執るように命じられた」という声を聞いた。それで彼は急いで墨を磨き、紙を拡げて香を焚き、静座して観音菩薩を静かに念じた。すると自然に考えが次々と浮かび上がり、筆が思いのままに動いて、「金姓復音」に関する数編の文章を一気に書き上げた。

文粛公のお告げとして池雲英に与えられた「金姓復音」の教えとは、大略次のようなものである。すなわち、いま朝鮮民族は困窮が極まった状態であり、危急存亡の時を迎えている。しかし、朝鮮はもともと天下で最も金の多い国であった。氏族の中で金姓が最も多いのもそのためである。この金姓は、もともと「금（クム）」という発音であったが、今は「김（キム）」という発音に変わってしまった。この発音をもとに戻せば、朝鮮は経済的に豊かになるというものであった。これに関して、『白蓮志異』では次のように記されている。

金姓はかつて「금（クム）」という音であったが、「김（キム）」の音に変わってしまった。それにより、金の痕跡がまったく無くなり、…（中略）…自ら民族の貧しさを招来して、朝鮮は天下第一の貧国となってしまった。もし旧態依然のままであったら、朝鮮は亡びて無くなってしまうであろう。しかし、金を「김（キム）」と発音しているのを、「금（クム）」と発音するならば…（中略）…百万の多くの金氏が本当の金を意味する姓字となって、自ら民族の富を求ねるようになり、自ら国土の富を願うようになる。そうすれば朝鮮は天下第一の富国となる。観音〔音の感応：引用者〕という点から言うと、朝鮮金姓氏族の「김（キム）」音には、金の痕跡がまったく無く、〔それ故に〕国土をして辱めを受ける極貧の地とならしめる。もし金姓氏族の音を「금（クム）」音に戻せば、自ら金を生み出す神韻〔神聖な音韻：引用者〕となり、その国土をして尊厳と栄光なる極富の地となさしめる。[65]

このように「金姓復音」とは、朝鮮で最も多い姓である「金」姓の発音を「김（キム）」から「금（クム）」に変えれば、「黄金」の本性が回復されて、朝鮮は経済的に豊かになるというものであった。

しかし、ここで疑問が生じる。池雲英の姓は「池」であるのに、なぜ他人の姓である「金」姓の重要性について力説しているのか。これに関しては、文粛公のお告げとして次のように説明されている。

上帝は私〔文粛公を指す：引用者〕に、白頭山闥門池の神となることを命じた。この天池の水はとても重要である。水は金を生み、金は水を生むからである。…「池」は水である。「水」の姓である神祖と人孫とが幽界で出会って、このような絶世の神妙なる出来事〔「金姓復音」の教えが与えられることを指す：引用者〕がなされたのである。何と偉大であろうか。水から金が生じるとは、「池」の姓より起こったのである。[66]

この部分を解釈すると次のようになるであろう。すなわち、五行説に

は相生説（木→火→土→金→水→木）と相剋説（木→土→水→火→金→木）がある。相生説の場合、一般的に「金生水（金→水：金が水を生む）」とするものであるが、ここでは「水生金（水→金：水が金を生む）」も成立するとして、「金」の要素と「水」の要素が互いに相手を生み出し合う関係にあることを示した上で、「水」姓である池氏と「金」姓である金氏が相補的な関係にあることを述べている。また、ここでは、文肅公が白頭山天池の主神となり、その後孫である池雲英と幽界（夢の世界）で出会って「金姓復音」の教えを伝えたとされている。これに対して、「水姓である池氏の教えによって金姓である金氏を復興させる」ということは、すなわち「水から金が生まれる」という原理に基づくものであると説明している。このことはまた、朝鮮国に「金」をもたらす（すなわち経済的に豊かにさせる）ものが白頭山天池の「水」の力であることを暗示してもいる。このような白頭山天池のもつ生命力に関しては、別の箇所で次のように記されている。

天下万国の主山の上に大きな池があるとは他に聞いたことがない。ただ一つ我が朝鮮の白頭山の上にだけ闥門池がある。周囲は八十里にして、鴨緑江、豆満江、黒龍江の三つの大河の発源所である。私〔文肅公を指す：引用者〕は今、天池金巌の水をお前〔池雲英を指す：引用者〕に授ける。これを使って国民に均しく注ぐのだ。これを一言で言い表すならば、「金姓は水から生じる」ということである。このことはすなわち、二千三百万の民衆は皆ことごとく水から生まれるということである。これはすなわち、朝鮮は水から生まれ、これに従って富が生じ、天下万国の根本になるということである。[67]

ここでは、白頭山の天池を世界で唯一のものとして称賛しながら、天池の「水」の生命力で朝鮮の経済的豊かさを成し遂げることが主張されている。

またこの夢の中で、文肅公は、池雲英に朝鮮を経済的に豊かにさせるための特別な政策を与えてもいる。それはすなわち、朝鮮と日本の双方に商業銀行（『白蓮志異』の中では「均商銀行」と記されている）を設立するというものである。これに関して文肅公は、池雲英に「日本より国金を一億萬円出して、朝鮮に均商銀行を創設する。続いて、二億萬円を以て日本に均商銀行を設ける」ように命じている。[68]

さらに興味深いのは、この提案が、日本の神霊たちも承認したものであるとされている点である。これに関しては、池雲英が金玉均暗殺のために日本に渡った際、伊勢神宮を参拝した時の出来事にまで遡る。先に述べたように、池雲英は一八八六年春に日本へ渡り、伊勢神宮を参拝した。その時、伊勢神宮の神明を称える「神宮詩七絶五首」を謳った。[69] 伊勢神宮の宮司たちも、「日本の建国以来、韓人がこのようなことをしたのは初めてである」として、その行為を賞賛した。その日の夜に、池雲英は天照大神から「一顆大明珠」を授けられるという夢を見た。その夢の中で、「太廟天照皇は〔池雲英の〕至誠に嘉悦して、池雲英に均商法の天命を授け、一億萬円を施して朝鮮均商銀行の資金とすることを許した」[70]と記されている。

さらに、別の日には、日本の天照大神が「菅原道真と楠正成の文武二神臣」に命じて、池雲英に「金姓復音」に関する伝言を授けさせるという夢を見ている。そこでは次のように記されている。すなわち、上帝は白頭山王に依頼して、朝鮮に「金姓復音」の教令を宣布させた。斉藤実総督をして池雲英に一丈雙竿杖を授けさせたのも、今まさに均商新法の機会がめぐってきたからである。朝鮮において「金姓復音」をするならば、富を所有する金運が回ってくる。さらに、日本によって均商銀行を

設けて、巨額の資金を援助すれば、まるで龍と虎が風雲に乗ったように東洋が大きく勃興し、西洋がこれに欽服して麗しく盛んとなる。そして、もしこの上帝の命に従わなければ、「人の震災がまさに甚だしい地の震災となるであろう。こうして上帝は激怒し、罰を降ろすに至るであろう」として、暗に関東大震災のような震災が再び起こるであろうと警告まで発している。[71]

そして『白蓮志異』の最後の部分には、一九二六年陰暦一一月二二日に見た夢の内容が記されている。この日は、池雲英の七五才の誕生日であり、兄弟と妻子が一同に集まって皆で食事をとり、幸せな時間を過ごした。その日の夜に、池雲英は不思議な夢を見た。その時に見た夢の内容を要約すると、次の通りである。[72]すなわち、夢の中で白頭山の神童が現れた。その童子は言った。「〔池雲英〕先生が「金姓復音」の教えを教示してくださったので、その徳に報いようと、金姓の人々が金神報徳会を設けて、先生にご来臨を願っています。」それでその童子について行くと、老少男女の金氏が多数集まっていた。また、そこには三層の壇が築かれており、壇の周囲は四間であり、上段には花紋で飾られた席が据えられていた。私はそこに座るように促された。無数にいた人々の中の一人が、一本の旗を恭しく持って来て、壇の前に立った。その旗には「金神報徳会」の五字が大書してあった。その後ろには、金の文字が書かれた紅い札が重なりあって閃いていた。慶州金氏、金海金氏、光山金氏、安東金氏、清風金氏、延安金氏、江陵金氏、海豊金氏、順天金氏、善山金氏など、非常に多くの札が見えた。池雲英が起立すると、それら多くの金氏が一斉に敬拝をした。その中から二人が壇上に上って跪いた。一人は金冠宰相（金宣平）であり、もう一人は金甲将軍（金庾信）であった。二人は金氏の各本貫の代表として、池雲英に敬礼をした。そして、二人は白頭山王池文肅公の命令を受けて来たとして、一冊の薄い冊子を池雲英に差し出した。その冊子を広げて見ると、頁は八十一張であり、すべての張ごとに、上には姓名が列挙され、下には金の重量が細かく書かれていた。二人は池雲英に向かって次のように述べた。

今日の朝、〔池雲英〕先生がつくった詩を読みました。そこでは次のように詠われています。「〔国が〕凍えて餓えて深い谷に落ち込んでしまったのに、どうして安心していられようか（いやできない）。もし、億万片の黄金で経済を豊かにすれば、民族国土を利益で潤すことができ、宏大で偉大なものとなる。しかし、私自身が凍えて飢餓に陥り、尽き果ててしまった。」このような詩を聞いて、どうして私たち〔金姓の人々を指す：引用者〕はじっと我慢していられましょうか（いやできません）。それで敢えて〔池雲英先生に〕ご来臨いただいて、その徳に報いるために感謝を申し上げようとしたのです。[73]

このように述べた後、二人は一幅の淡緑色の錦の掛け軸を持って来た。そこには、池雲英の徳を讃える「格回上帝、代理観音、白蓮甘露、青邱渾金」という十六文字が書かれていた。そして二人は壇上に上り、池雲英と対座して、酒を酌み交わした。そして、二人は池雲英が患った奇妙な病気が過去世からの因縁によるものであることを説明した後で、次のように述べた。

〔池雲英先生は〕四十年もの間、「朝鮮興」と大きく叫び、その数は数百万回を超えるほどです。これは自分の力によるものではありません。また魔鬼によるものでもありません。それは天によるものです。それは魔鬼の声ではなく、天が自ずから発した声なのです。それでこのように激しく回数が多いのです。もし朝鮮を復興させるならば、日本も

同じく復興し、中華もそれに合わせて復興します。そうすれば東洋全体が均しく復興します。私たちは先生の雷のような一声が発せられるのを聞きたいのです。[74]

このように促されたので、池雲英は精神を集中させ、観音を黙念して、禅定の状態に入った。そして、突然大きな声で「朝鮮興」と叫んだ。すると二公〔金宣平と金庾信〕と白頭山神童がさっと起立して、皆一緒に「朝鮮興」と大声で叫んだ。壇下にいた四面八方の無数の衆人たちも一斉に「朝鮮興」と叫び、その声は天地を震動させた。池雲英はその声の大きさに驚いて、夢から目を覚ました。そして、「私が見たこの夢について、誰が理解することができるであろうか（いや誰も理解できないであろう）」と述べ、大きな笑いを一声発した。[75]このようにして、池雲英が味わった積年の恨みが最後に一気に晴らされるような爽快な場面で、『白蓮志異』全体が締めくくられている。

おわりに

朝鮮末期の激動の時代において、池雲英は西洋の新文化をいち早く吸収しようとし、政界進出や社会的な成功を夢みた。しかし、彼は二度にわたって大きな試練に直面した。一度目の試練は、甲申政変の際に、自ら心血を注いで開設した写真館が民衆たちの暴動によって破壊されてしまったことである。そして二度目の試練は、金玉均の暗殺に失敗して寧辺へ流配の刑に処されたことである。この流配措置は特に屈辱的なものであり、その過程で彼は、所かまわず「朝鮮興」と叫び出す奇妙な病気を患うようになった。池雲英が患った病気は、トラウマ（心的外傷）が無意識深くに沈潜し、コンプレックス（劣等的複合心理）として凝り固まり、

意識の力ではコントロールできない身体的な発作として発動したものであったと言えよう。それは、現代の精神医学の観点から言うと、ヒステリー（解離性／転換性障害）の一種であったと見なすことができるだろう。[76]

池雲英個人が体験したこのような挫折は、彼が生きた時代の中で、朝鮮民族全体の挫折と重なり合っていた。当時の朝鮮は、西洋文化の東漸にうまく対応することができず、日本の植民地支配を受けて、屈辱と貧困の世界の中に閉じ込められてしまった。池雲英が受けた個人的トラウマは、ある意味で、当時の朝鮮人全体が受けた集団的トラウマに通じるものでもあった。池雲英が発した「朝鮮興（チョソン、フーン）」という叫び声は、それを文字通り解釈すると「朝鮮は復興する」という意味になる。池雲英が個人的無意識の中から発した「朝鮮興」という叫び声は、「朝鮮よ、復興せよ」という朝鮮人全体の叫びを代弁したものであったと言えよう。特に、池雲英が夢の中で神霊たちから与えられたとされる「金姓復音」の教えは、植民地支配下で貧困に喘ぐ朝鮮人全体の抑圧された集団的コンプレックスを心理的に補償するものとして意識に立ち上ってきたものであり、ある意味で、それは朝鮮の経済的復興をめざそうとする朝鮮人全体の集合的無意識が、池雲英の個人的無意識を通じて表出されたものであったと解釈することができるのではないか。[77]

このようにして四十年以上もの間、朝鮮の復興を大声で叫び続けた池雲英が、大倧教創設の際に何らかの役割を果たしたと考えるのは、それほど理不尽な話ではないであろう。池雲英が体験した夢の内容を考えると、彼が檀君肖像画や『三一神誥』の創作に関わったとする証言は、むしろ信憑性のあるもののように思われる。これに関して先行研究では、一九一〇年代に羅喆が白頭山を調査した際、白頭山の様子を模写するために池雲英を同行させた可能性があることが指摘されている。[78]池雲英が写真家として朝鮮国内で写真館を開業し、高宗の写真を朝鮮人として最

初に撮影した人物であることを考えると、これは十分に信憑性のある話であると言えよう。実際に『白蓮志異』には、池雲英が夢の中で白頭山の天池に行った時の様子が記されているが、それはまるで実際に現地へ行った時の感動が再現されたかのような筆致で描かれている。

また、池雲英が大倧教の根本経典である『三一神誥』を創作したという証言も、まったく根拠の無い話ではないように思われる。池雲英は、詩書画に通じた文人画家として知られ、また儒教・仏教・道教の三教に精通していた。道教に関しては、光武年間に高宗の命を受けて中国の龍虎山に行き、張天師像を持ち帰って朝鮮国内の道観に奉安するという経験を有していた。仏教に関しては、観音菩薩を黙念するという観想修練を長年続けるほどであった。また、蘇軾の「赤壁賦」に大きな影響を受け、蘇軾の弟子を自認するほど心酔していたことからも分かる通り、中国の古典にも広く通暁していた。このように儒仏道三教に精通していた池雲英が、大倧教の経典である『三一神誥』を創作したとしてもおかしくはないであろう。少なくとも『三一神誥』を創作するだけの古典の知識と漢文能力を、彼は十分に有していた。

そしてまた、池雲英が大倧教と何らかの関係を有していたことは、『白蓮志異』の中で檀君の神聖さが強調されている点からもうかがえる。すなわち、本書では「最も重大な事実」を語るとして、文肅公が池雲英に次のように語っている。すなわち、「上帝はこの地球世界において、かつて分身応化なさった。それはただ一回のみで、朝鮮の檀皇だけのことである。それ故に、上帝とは即ち檀皇であり、檀皇とは即ち上帝である。檀皇は神聖なる英霊にして、燦然と輝いて広大であり、つねに朝鮮に臨在して明るく照らしているのである」[79]と述べている。このように『白蓮志異』では、上帝つまり宇宙の最上神が檀君であると強調している。また、ここでは檀君のことを「檀皇」と称している点にも注目したい。大倧教の根本経典である『三一神誥』では「上帝即檀君」と見なした上で「檀帝」という用語が使用されているが、[80]それとの強い類似性が見られるからである。

また、池雲英が大倧教と何らかの関係を有していたのは、彼の実弟である池錫永と息子の池盛彩が大倧教に入信していた事実からもうかがえる。池錫永について見てみると、彼は一九一〇年代頃に大倧教の国内支部である南一道本司に所属していたことが記録に残されている。[81]また、一九二一年一一月二日（陰暦一〇月三日）の開天節の際に南道本司で盛大な式典が挙行されたが、池錫永はその時に司会をつとめている。[82]このことから一九二〇年代においても彼が南道本司の主力メンバーとして活動していたことがわかる。

さらに、池雲英の二番目の息子であり、後に池雲英の二番目の兄（池舜英）の養子となった池盛彩（一八九九～一九八〇）も、大倧教に入信していたことが確認されている。[83]池盛彩は、一九一九年から趙錫晋の門下生として画家としての道を歩み始めた後、一九二〇年代の朝鮮美術展覧会において数々の入選を果たした。特に一九二三年第二回朝鮮美術展覧会東洋画部に入選した「美人針線」が、李王室によって購入されたことで知られている。日本の植民統治が進むと、彼は筆を捨て、名前を李大昌と変えて独立運動に奔走した。後孫の証言によると、大韓独立軍や大同青年団などの活動に従事したとされる。檀君を信仰対象とする大倧教は、もともと民族独立運動団体としての性格を強く有し、一九一四年には教団本部を中国領内へ移転し、大韓民国臨時政府の右派系独立運動家たちと連動しながら抗日独立運動を展開した。[84]池盛彩が独立運動に関わるようになったのも、彼が大倧教の信徒であったからだと考えられる。ちなみに、現在、韓国ソウル市にある大倧教本部で祀られている檀君肖像画は、一九四六年に大倧教総本司が韓国国内に帰還した際、池盛彩に依頼

して作成したものであるという。[85]

本稿で考察対象とした『白蓮志異』の中には、池雲英と大倧教との直接的な関係を示す記事は収められていない。しかし、池雲英は数多くの論著・草稿類を残しており、その多くがまだ整理されておらず、非公開となっている。柳永博氏が作成した未公開文献の目録リストを見ると、「大倧教（草稿）：唐紙一枚」「太上大通経：三枚」「関帝論：五枚」「上玉皇上帝書：一枚」「北斗進命経：一枚」などが含まれている。[86] 池雲英と大倧教との関係について知るためには、それらを含む池雲英が残した遺作品全体の分析が今後の課題となるであろう。

注

① 拙稿「韓末における檀君教の『重光』と檀君ナショナリズム」（『朝鮮学報』第一八〇輯、二〇〇一年七月）。本教団は創設当初、「檀君教」と称したが、翌年「大倧教」と改称した。本稿では「大倧教」の名称で統一する。

② 大倧教では、白峯とその弟子たちが一九〇四年陰暦一〇月三日に白頭山にある大崇殿古経閣に会合し「檀君教佈明書」を宣布したことに教団創設の由来があるとしている（大倧教倧経倧史編修委員会編『大倧教重光六十年史』大倧教総本司、一九七一年、八一頁）。

③ 前掲『大倧教重光六十年史』一〇四頁。

④ 趙仁成「韓末檀君関係史書의 再検討：『神檀実記』『檀奇古史』『桓檀古記』을 中心으로」（『国士舘論叢』第三輯、国史編纂委員会、一九八九年、二三九頁）。

⑤ これらの新出資料をもとに白峯集団について考察した論文が発表されている。趙俊熙「白峯神師의 道統伝授에 관한 研究」（『仙道文化』第一輯、仙道文化研究会、二〇〇六年）、金鐸「白峯教団의 実体와 宗教史的意義」（『第一次仙&道国際学術大会』報告論文、二〇〇九年一〇月）。

⑥ これに関しては、拙稿「間島地域에서 大倧教의 初期活動과 白峯集団」（高炳徹編『間島와 韓人宗教』韓国学中央研究院、二〇一〇年）を参照。

⑦ 李龜烈「伝統継承의 新色彩画様式開創」（韓国近代美術研究所編『以堂金殷鎬』国際文化社、一九七八年、一五～八頁）。

⑧ 金殷鎬『書画百年』（中央日報社、一九八一年、二三二～三頁）。

⑨ 拙稿「旧韓末における羅喆の訪日活動—朝鮮開化派亡命政客および玄洋社系人士との交流を中心に」（『立命館文学』第六五七号、二〇一八年三月、二三頁）。

⑩ 曺庭六「心田安中植의 生涯와 芸術」（韓国近代美術史学会『韓国近代美術史学』創刊号、一九九四年、八三～一〇四頁）、李龜烈「心田安中植：伝統의 継承、近代韓国画의 開創」（『韓国近代絵画選集、韓国画（一）安中植』金星出版社、一九九〇年）参照。

⑪ 編修兼発行人金教献『三一神誥』（大倧教本司発行、朝鮮書館発売、一九一二年）。

⑫ 前掲『大倧教重光六十年史』一〇四頁。

⑬ 姜壽元編『大倧教要鑑』（大倧教総本司、一九八三年、三～四頁）。

⑭ 池錫永の生涯については、大韓医史学会編『松村池錫永』（図書出版아카데미아、一九九四年）、愼鏞厦「池錫永全集解題」『池錫永全集（一）』（亜細亜文化社、一九八五年）を参照。

⑮ 『東亜日報』一九二八年九月二一日付、第一面一段「朝鮮의 젠니」、同第二面九段「種痘五十年紀念、池錫永氏表彰」。一九八七年にソウル大学校医科大学付属病院の前に池錫永の銅像が建てられた。

⑯ 池雲英の未公開資料に関しては、柳永博「白蓮池雲永의 未公開文巻著冊目録」（『図書館研究』第二二巻第三号、韓国図書館協会、一九八一年）を参照。

⑰ 現在、整理保存作業が行われている際中であり、まだ一般公開はされてはいない。

⑱ 国学人物研究所所長の趙埈熙氏を通じて『白蓮志異』の複写本を入手することができた。この場を借りて深く謝意を表したい。

⑲ 『白蓮志異』は全文漢文で書かれた手稿本であり、以下のような短編が含まれている。「白蓮志異」「金姓復音前解」「金姓復音後解」「詼諧前跋」「煅錬後跋」「金姓復音統論前篇」「金姓復音統論後篇」「上陽宮詞十首」「前論」「後論」「前証」「後証」「前警」「後警」「一根雙竿杖贊」「白蓮志異末

記」。なお、本書の最後に掲載された「白蓮志異末記」は、弟の池錫永が書いたものであり、最末尾に「家弟錫永謹書于鵬怒飛閣、李鍾国謹書」と記されている。このことから、池錫永と李鍾国が本書全体を筆写したことがわかる。本書には奥付がなく、著述年について記されていないが、「前論」の中で「丁亥（一八八七年）より今の丙寅（一九二六年）の四十年間」病気を患ってきたと書かれていることから、おそらく一九二六年頃に編まれたものではないかと考えられる。

⑳ 拙稿「朝鮮近代における白頭山神聖観念の形成―大倧教系言論人の活動を中心に」（『韓国朝鮮の文化と社会』第一一号、二〇一二年、一一八頁）。

㉑ 以下、池雲英の生涯に関しては主に、崔仁辰『韓国写真史：一六三一～一九四五』（근빛、一九九九年）、卞京花『白蓮 池雲英의 生涯와 作品世界』（梨花女子大学修士学位論文、二〇〇七年）を参照した。

㉒ 金在翰「白蓮池雲英의 絵画世界研究」（『韓国近現代美術史学』第二一号、二〇一〇年、八頁）。

㉓ 崔卿賢「池雲英과 그의 画風―海上画派와의 관련을 중심으로」（『韓国近現代美術史学』第一五号、二〇〇五年、三五四頁）。

㉔ 崔仁辰、前掲『韓国写真史』一〇八～九頁。

㉕ 『漢城旬報』第一五号、一八八四年三月一八日付、「国内私報」欄にそのことが報じられている（崔仁辰、前掲『韓国写真史』一一〇・一七八頁）。

㉖ 『尹致昊日記』巻一、『韓国史料叢書』第一九集、高宗二一（一八八四）年三月一六日条による（崔仁辰、前掲『韓国写真史』一一〇頁）。

㉗ 池雲英の息子である池盛彩が崔仁辰に語った証言による。この時に撮影したガラス原板は朝鮮戦争まで池雲英の後孫が保管していたが、公州へ避難している間に紛失・破損してしまったという（崔仁辰、前掲『韓国写真史』一一二頁）。

㉘ 池盛彩が崔仁辰に語った証言による（崔仁辰、前掲『韓国写真史』一一三・一一八・一二四頁）。

㉙ 日本側の記録としては、国立公文書館「アジア歴史資料センター」の「韓人池運永関係ノ件（一）明治一九年六月七日から明治一九年七月一六日」『韓国亡命者金玉均ノ動静関係雑件（京城説伝）』巻二、外務省外交史料館所蔵（Ref. B03030200800）、「韓人池運永関係ノ件（二）明治一九年七月一八日から明治二〇年一月一〇日」同上（Ref. B03030200900）、「韓人池運永関係ノ件（三）明治一九年六月二三日から明治二〇年四月一二日」同上（Ref. B03030201000）、「金玉均本邦退去ノ件（一）明治一九年五月二九日から明治一九年七月二六日」外務省外交史料館所蔵（Ref. B03030201100）に関連記事が掲載されている。

㉚ 葛生玄晫編輯兼発行『金玉均』（民友社印刷、一九一六年）、松本正純『金玉均詳伝』（厚生堂、一八九四年）などに詳述されている。本書では特に、松本正純『金玉均詳伝』に収録されている池運永「所経大概」（一〇〇～一〇四頁）を参照した。

㉛ 池運永「所経大概」（松本正純、前掲『金玉均詳伝』一〇〇～二頁）。

㉜ 同右、九七頁。

㉝ 同右、一〇三頁。

㉞ 同右、九七～一〇〇頁。

㉟ 『高宗実録』巻二四、高宗二四（一八八七）年四月二六日条および四月三〇日条。

㊱ 著作兼発行者池錫永『壬戌元朝説』（啓文社、一九二二年、八～九頁）。崔卿賢、前掲「池雲英과 그의 画風」、三五七頁。

㊲ 崔卿賢、前掲「池雲英과 그의 画風」三五七～八頁。

㊳ 『皇城新聞』一九〇四年一一月二三日付、第三面第二段、〈雑報〉「池崔渡滬」。この記事では「前議官池運永氏が油画を学習するために清国上海等地へ出発したが、崔岡氏も前往したという説がある」と記されている。

㊴ 李能和『朝鮮道教史』（李鍾殷訳注、普成文化社、一九九二年、五〇～一頁）。この話は、朝鮮自生の新宗教である白白教の項目の中に記されたものである。なお、池雲英と共に龍虎山に派遣されたとされる崔時鳴という人物が、注（三八）の記事の中に出てくる崔岡と同一人物であったかどうかは不明である。

㊵ 崔卿賢、前掲「池雲英과 그의 画風」三六〇頁。

㊶ 『純宗実録付録』巻一四、純宗一六（一九二三）年三月二六日条。

㊷ 〈万華鏡〉「三廣党과 八絶老」（『別乾坤』第六巻第五号、一九三一年五月、開闢社、八頁）。

㊸ 『東亜日報』一九三五年六月八日付、夕刊「池雲英（白蓮）氏永眠」、『朝

鮮中央日報』一九三五年六月八日付、夕刊「詩文書画大家池雲英翁永眠」。

㊹『白蓮志異』「白蓮志異末記」八四～五頁。

㊺『白蓮志異』「白蓮志異末記」八五頁。

㊻同右。

㊼同右。

㊽一九三一年に『東亜日報』に「韓末秘史：最後六〇年遺事」という題目で連載されたものを、後に一冊の単行本としてまとめたものである。尹孝定『風雲韓末秘録：最近六十年의 秘録』（京城：野談社、一九三七年）。

㊾尹孝定著『風雲韓末秘録：最近六十年의 秘録』（박광희訳『大韓帝国아 망해라』다산북스、二〇一〇年、二六一～六頁）。

㊿檀君神話が掲載された『三国遺事』紀異篇の「古朝鮮」条では、天帝の息子桓雄が太伯山に降臨したことが記されているが、これに対して、編者の僧一然はこの太伯山を妙香山であると註記している。

(51)서신혜、황인건『五千年歴史、妙香에 오르다』（평단문화사、二〇〇六年、二九二頁）。

(52)「亦顕霊、屢承神訓、皎如陽界、以上神異、皆従禅定中得来」（『白蓮志異』「白蓮志異末記」八七頁）。

(53)例えば、白蓮居士池雲英「西来眞儀出現之縁起」（『朝鮮佛教総報』第二二号、京城：三十本山聯合事務所、一九二一年）には、夢の中で達磨大師に会い、その時の体験をもとに達磨像を描いたことが記されている。また、『壬戌元朝説』（著作兼発行者池錫永、一九二二年）では、夢の中に中国宋代の詩人蘇軾（一〇三七～一一〇一：号は東坡）が現れて、彼の代表作である『（前後）赤壁賦』の奥義を教えられ、その後、蘇軾の神霊が直接筆に降りて「東坡先生笠屐図」を描いたことが記されている。

(54)白蓮居士池雲英、前掲「西来真儀出現之縁起」七頁。

(55)白蓮居士池雲英、前掲「西来真儀出現之縁起」一三頁。

(56)『白蓮志異』「前論」三六～八頁。

(57)『国訳尹致昊英文日記』第七集、『韓国資料叢書翻訳書』第七集、一九二〇年九月四日条。

(58)池雲英が描いた「観世音菩薩図」が近年韓国で公開された。「하나뿐인 池雲英　仏画〝観音菩薩図〟初公開：釜山博物館、新受遺物紹介展」『国際新聞』二〇一五年六月九日付（http://kookje.co.kr/news2011/asp/newsbody.asp?code=0500&key=20150610.22021193114、2018.11.10閲覧）

(59)三幕寺の現住所は、京畿道安養市萬安区石水洞一〇―一である。京畿道安養市は二〇一八年六月二七日に「三龜字」を郷土文化財に指定した。「安養市、三幕寺三龜字等　郷土文化財指定」『時代日報』二〇一八年六月二九日付（http://www.sidaeilbo.co.kr/sub_read.html?uid=187959、2018.11.10閲覧）。

(60)一九二〇年代に斉藤実総督から池雲英へ記念品として授与されたものであり、一つの根から出た二本の竿を合わせて作った杖である。『白蓮志異』の最終頁（八八頁）にその挿絵が掲載されている。

(61)『白蓮志異』「白蓮志異」一～二頁。

(62)『白蓮志異』「白蓮志異」二～三頁。

(63)『白蓮志異』「白蓮志異」三～五頁。

(64)解放後の一九四六年に「乙支路」に改名され、一街から七街までが設置された。「乙支」という名称は、薩水の戦いで隋の大軍に勝利した高句麗の乙支文徳将軍に由来する。

(65)『白蓮志異』「前警」六二～三頁。

(66)『白蓮志異』「前論」四七頁。

(67)『白蓮志異』「後論」五二頁。

(68)『白蓮志異』「後論」四九頁。

(69)池雲英が伊勢神宮を参拝したことは、当時の日本の新聞にも報じられたようである。これに関して池雲英は「東京に入って新聞を見ると『韓人拝廟』と題した記事があった。私が祈祷した事が大略記されていたが、祝辞の十六字が黒く囲まれて空いていた」と述べている（『白蓮志異』「後論」五〇頁）。

(70)『白蓮志異』「後論」五〇～五一頁。

(71)『白蓮志異』「後警」六六～六八頁。

(72)以下は、『白蓮志異』の最後の部分に付されている「丙寅十一月二十二日の夢」（七七～八二頁）の内容を要約した。

(73)『白蓮志異』「丙寅十一月二十二日の夢」八〇頁。

(74)『白蓮志異』「丙寅十一月二十二日の夢」八一～二頁。

⑮『白蓮志異』「丙寅十一月二十二日の夢」八二頁。

⑯ C・G・ユング著、宇野昌人・岩堀武司・山本淳訳『心霊現象の心理と病理』（法政大学出版局、一九九三年、九八～一〇七頁）の「ヒステリー発作との関係」を参照。

⑰ C・G・ユング著、野田倬訳『自我と無意識の関係』（人文書院、二〇一七年、二七頁）。

⑱ 二〇〇四年に羅喆の遺品の中から白頭山写真の銅版が発見された。その際、遺品の所有者である羅喆の曾孫婦朴ミンジャ氏は「これらの写真は白蓮池雲英画伯が撮影したと伝えられている」と証言した。これに関して、羅喆が張志淵に送った一九一一年四月七日付の手紙に「白頭山は雪が多くて登ることができず、来年再び登るつもりである」と書かれている。このことから白頭山が撮影されたのは一九一二年頃であり、この時、池雲英が同行したものと推定される（卞京花、前掲「白蓮池雲英의 生涯와 作品世界」三一頁）。

⑲「且以第一重大事実、告于汝也、上帝於此地球世界、曾為分身應化、惟独朝鮮之檀皇一次而已、然則上帝即檀皇、檀皇即上帝、是以神聖英霊、赫赫洋洋、恒有照臨於朝鮮」（『白蓮志異』「後論」五四頁）。

⑳『三一神誥』本文の「天訓」（注）による（金教献、前掲『三一神誥』一頁）。大倧教では檀君のことを「檀君大皇祖」と称していた。「檀皇」という名称は、これを略した用語であると考えられる。

㉑ 玄圭煥『韓国流移民史』（語文閣、一九六七年、五六九頁）。

㉒『東亜日報』一九二一年一一月三日付、第三面二段「檀君降世의 紀念日」。

㉓ 趙俊熙「三神思想에 대한 文化的考察（一）：大倧教의 胎教思想을 中心으로」（『国学研究』第七輯、二〇〇二年、一六一頁）。

㉔ 拙稿「亡命ディアスポラによる朝鮮ナショナル・アイデンティティの創出―大倧教が大韓民国臨時政府運動に及ぼした影響を中心に」（『朝鮮史研究会論文集』第四三集、二〇〇五年一〇月）。

㉕「初代文教部長官安浩相による証言」（前掲『大倧教要観』三頁）。

㉖ 柳永博、前掲「白蓮池雲永의 未公開文巻著冊目録」六五頁。

（本学文学部教授）